



👁️👁️ みどころ

1995年に起きた連続殺人事件でも、「公訴時効」が完成すれば犯人は自由。そして出版も自由。その殺人犯が自ら書いた暴露本はベストセラーに。犯人がイケメンなら、なおさらだ。

そんな発想で作られた韓国映画『殺人の告白』（12年）を日本版にアレンジした本作が登場！日本では2010年に刑事訴訟が改正され、殺人罪の公訴時効は廃止されたが、本作では脚本上のテクニクによって面白いトリックも・・・。

警察や司法がダメならメディアがあるさ！本作後半は、そんな狙いで人気番組「NEWS EYES」スタジオでの「直接対決」がメインになるが、そこで次々に明らかにされていく真実とは・・・？そして、結末に訪れる、あっと驚く連続殺人事件の真相とは・・・？

現代的論点をテコ盛りにした本作を、韓国映画『殺人の告白』と対比しながらしっかり鑑賞し、その問題点を共有したい。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

■□■あれ、このシーンはどこかで見たような・・・？■□■

2016年5月12日に満80歳で亡くなった蜷川幸雄氏に『身毒丸』で見い出された藤原竜也は、『デスノート』（06年）前編、後編がはまり役で、そこでの演技が強く印象に残っている（『シネマルーム11』393頁参照、『シネマルーム12』85頁参照）。そんな若手を代表する芸達者でイケメン俳優の藤原竜也が、「私が殺人犯です」と題された新刊本を見せながら、次々とシャッターが切られるカメラの前に立つ姿は、アレレこりやど

こかで見たような・・・？

そう、それは藤原竜也と同じような(?) 韓国のイケメン俳優パク・シフが、自ら犯した連続殺人の公訴時効が完成したことを受けて出版した「私が殺人犯です」と題する本を見せながらカメラの前で微笑んでいる姿と全く同じ。つまり、本作は韓国映画『殺人の告白』(12年)『シネマルーム31』205頁参照)のリメイクなのだ。

韓国では1986年から91年にかけて「華城連続殺人事件」が起こり、それをネタにしたポン・ジュノ監督の『殺人の追憶』(03年)が作られたが、そこでは結局犯人は逮捕できなかった(『シネマルーム4』240頁参照)。殺人事件が迷宮入りするのはある意味仕方ないが、『ロクヨン』(16年)前編、後編をみても、その悔しさは如何ばかり(『シネマルーム38』10頁、17頁参照)。

しかるに、そこに追い打ちをかけるように殺人罪の「公訴時効」が完成し、犯人が法的に処罰されることがなくなった後、藤原竜也扮する曾根崎が「私が犯人です」と名乗り出たうえ、その本がベストセラーになり、マスコミやSNSが犯人をもてはやすことになると、犯人を取り逃がした刑事や被害者の遺族たちの悔しさは一層増幅されることに・・・。

■5件の連続殺人事件は1995年。それから22年!■

韓国で華城連続殺人事件が起きたのは1986年～91年にだったが、本作が設定した5件の連続殺人事件が起きたのは1995年。1995年という年は、1.17の阪神淡路大震災、3月20日の地下鉄サリン事件が起きた激動の年で、社会的不安が蔓延した極めて異常な年。そんな年に限ってこんな連続殺人事件が起きたうえ、22年経っても犯人が特定されないまま公訴時効を迎えていたわけだ。

本作に登場する連続殺人事件の被害者の遺族は、①父親を殺された本屋で働く女性・岸美晴(夏帆)、②妻を目の前で絞殺された医師・山縣明寛(岩松了)、③最愛の彼女を殺され、さらに馴染みのホステスまで殺された暴力団橋組の組長・橋大祐(岩城滉一)の3人。また、牧村航(伊藤英明)の上司だった刑事の滝幸宏(平田満)も、牧村と一緒に犯人の家に突入した時に犯人の罠にかかって死亡していたから、牧村もあの連続殺人事件の被害者の1人。

他方、牧村の妹・牧村里香(石橋杏奈)は看護師として働いていた時に発生した阪神淡路大震災のトラウマに悩まされ続けていたため、恋人小野寺拓巳(野村周平)の求婚にも容易に応じることができず、兄と共にずっと悩みながら生き続けてきた女性だ。したがって、里香は連続殺人事件の直接の被害者ではないが、牧村と共に犯人を追っていた小野寺が、ある日里香を失った絶望の中でビルの屋上から飛び降り自殺してしまったから、この点では里香も連続殺人事件の被害者・・・？

本作では1995年に起きた5件の連続殺人事件の直接の被害者のみならず、その遺族や捜査関係者等その周辺の広い意味での被害者たちと、それから22年間という長い年月

の重みに注目しながら、『私が殺人犯です』の出版後に次々と起きるあつと驚く事件に注目！

■□■殺人罪の公訴時効を巡るトリック(?)に注目!■□■

韓国映画『殺人の告白』では、2007年12月19日午前0時に15年という殺人罪の公訴時効が完成するものの、そこに14分間の「誤差」(トリック?)が生じるのが大きなポイントになっていた。それに対して日本では、2010年の刑事訴訟法の改正によって法定刑に死刑を含んでいる殺人罪については公訴時効そのものが廃止されたため、本作では殺人罪の15年の公訴時効が2010年に完成した後に刑法法の改正がなされることを前提にしているが、後半には韓国版と似たようなある誤差(トリック?)が登場するので、それに注目!

松本清張の『点と線』では時刻表のトリックが最大のポイントとして注目されたが、さて本作が工夫に工夫を重ねて作りだした、そのトリックとは……?

■□■刑事はもちろん、妹とその恋人の動きに注目!■□■

本作前半では、告白本『私が殺人犯です』のサイン会当日に曾根崎雅人(藤原竜也)に挑発された牧村が曾根崎に殴り掛かるシーンが登場するが、今ドキのマスコミヤ若者のSNSは、何よりもこんな刺激的なシーンを欲しているから、これはたちまち拡散し、新刊書の売り上げ増に大きく貢献することに。

他方、被害者遺族の一人で現在は書店に勤めている美晴は、曾根崎の告白本の出版とその爆発的な売れ行きに不満タラタラだったが、それによってたつぷりと儲けを企む出版社もあるから、今ドキの出版を巡る構造は複雑だ。そもそも、こんな本の出版は許されるの?被害者遺族たちの意見は当然そうだが、他方で「表現の自由」、「出版の自由」は憲法上保障された権利だ。とはいっても、曾根崎の生命が狙われる危険があるのは当然だから、出版社はそれなりの防衛策を講じていたが、戸田丈(早乙女太一)のような暴力団橋組の組員で鉄砲玉のような男にかかれば、曾根崎の殺害なんてチョロイもの……。そう思っていたが、それを寸前のところで身を挺して救ったのが牧村だから、アレレ……。

牧村は曾根崎が大嫌いなものだから、何も自分の身を挺してまで曾根崎を守る必要はなく、自然の成り行きにまかせて曾根崎が殺されるのをみていればよかったのでは……。誰でもそんな風に思ってしまうはずだが、練りに練られた本作の脚本では、その後の牧村の妹里香とその恋人小野寺拓巳の動きが本作のストーリー形成の大きなポイントになるので、それに注目!ネタバレになるため、その詳細をここに書けないのは残念だが、その展開はあなた自身の目でしっかりと……。

■□■このキャストは正義の味方?いやはや私は……■□■

大のマスコミ嫌いを自認しているトランプ大統領は、さかんに大手マスコミ報道を「フェイクニュース」と主張し、自分のフェイスブックの効用を信じているらしい。ここでハッキリ私の意見を言うと、大手マスコミ報道のインチキ性については私も同感だし、それを助長したのが久米宏、古館伊知郎等のニュースキャスターであることは明らかだ。「自分こそ正義だ」「自分こそ民意を代表している」と思い込み、したり顔で至極当たり前の解説と当たり前の結論をテレビで聞くのはノーサンキュー。そんな風に思っている私には、本作後半に登場してくる人気報道番組「NEWS EYES」のメインキャスターである仙堂俊雄（仲村トオル）の姿は、いかにもさん臭く見えてしまう。時効のために殺人犯を警察や司法の力で裁けないならマスコミの力で裁くというのが彼のスタンスだが、そもそもその考え方の妥当性は？そして、本件にみる彼のやり方の妥当性は？

彼のやり方は、自分の番組に曾根崎と牧村の両方を呼び出し、公開で議論すること。それは私も賛成だが、そこでの論点整理のやり方が大問題だし、さらに曾根崎の安全の確保は・・・？そんな心配を内包しつつ仙堂が進めていく番組の内容はそれなりのもの。なるほど、このように順当に論点を整理していけば・・・。そう思っていると・・・。

そこからは韓国版『殺人の告白』とよく似たものとなり、「我こそが真犯人！」と名乗り出る者が登場したり、曾根崎がその場であつと驚く告白をしたり、と想定外の展開を見せていくので、それはあなた自身の目でしっかりと・・・。

■ラストにみるあつと驚く直接対決は？こんなのあり？■

本作で仲村トオルが演じた仙堂俊雄は、今でこそ人気番組「NEWS EYES」のメインキャスターを務め、キレイ事ばかりを語ってるが、過去は戦場記者としてかなりリスキーな取材をしていたらしい。そこが久米宏や古館伊知郎と大きく違う仙堂俊雄のキャラだが、本作ラストにみるあつと驚く「直接対決」では、そこで鍛えられた（？）仙堂の本性が暴露されるので、それに注目！

仲村トオルはビッグネームだが、あなたは彼がロウ・イエ監督の中国映画『パープル・バタフライ』（03年）で章子怡（チャン・ツイイー）らと共演し、日本軍秘密諜報部員という役で出演していた（『シネマルーム17』220頁参照）のを知ってる？2003年のそんな中国映画で難しい役をこなしていた仲村トオルなら、本作における仙堂のような複雑なキャラを演じ分けるのもオーケー。本作ラストにみる仙堂の実像とその開き直りのサマはまさに演技派仲村トオルの演技力の賜物だから、それに注目！それにしても、あの1995年の連続殺人事件の実態がこんなものだったとは！こんなのあり・・・？

2017（平成29）年6月16日記